
SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.128 February 2012

新学術領域研究

◆ 新学術領域研究第6回国際シンポジウム ◆
「近現代帝国の比較」開催される



セッションのひとつ

2012年1月19～20日に、センターの冬期シンポジウムを兼ねた新学術領域研究第6回国際シンポジウム“Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order [近現代帝国の比較：世界秩序変動の中での帝国統治と脱植民地化]”が、スラブ研究センター大会議室で開催されました。新学術領域研究はロシア、中国、インドを主な対象としたものではありませんが、帝国比較のためにはさまざまな帝国を視野に入れる必要があること、帝国

は帝国間および国民国家や小地域との関係性の中で機能してきたことから、今回のシンポジウムでは、日本、アメリカ、オスマン帝国、イラン、中央アジアに関する報告も入れました。

1日目は、ジェーン・バーバンク氏による、帝国が多様な社会をどのように統治し、近現代にどのように変化したかに関する基調講演に始まり、帝国の統治技術、イデオロギー、相互認識・歴史認識などを議論しました。特に議論の焦点になったのは、帝国中央とは異質な社会を統治する際の仲介者・協力者の存在であり、また帝国の保守主義と近代化の関係も話題になりました。2日目は、帝国の崩壊とその遺産、脱植民地化に対する諸大国の態度、アメリカの帝国性や中国の再帝国化の可能性などを議論しました。戦後インドの経済発展が可能になったのが、イギリス帝国の遺産や外国の援助を巧みに活用したためか、帝国支配の悪影響を克服したためかについては、相異なる見方が披露されました。

全体として、多様な話題について非常に活発な議論が繰り広げられ、帝国研究の世界的な発展と、その今日的な意義を、凝縮した形で感じ取ることができました。今回は、企画を担当



会議終了後に全員で記念写真

した新学術領域研究第4班の班員がなるべく多く報告するという方針をとりましたが、日本人の報告の水準が高かったという評価を外国人ゲストの方々から戴けたのも嬉しいことでした。また、前日の1月18日には、プレシンポジウム・セミナーとしてセンター外国人特任教授3人の報告会を開き、外国人研究員とシンポ参加者の交流を深めることもできました。[宇山]

1月18日(水) プレシンポジウム・セミナー

タラス・クジオ (トロント大学/センター) 「20歳のウクライナ: ポスト・ソヴィエトかネオ・ソヴィエトか?」

ノナ・シャフナザリヤン (クバン社会経済大学/センター) 「アルメニア・ディアスポラを通して見た『ソヴィエト人』: 表象、ステレオタイプ、イメージ」

ヴラジーミル・シシキン (ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所/センター) 「ロシア帝国の再起動、1917-1922年: 近代化の要因としての戦争と革命」

司会: 望月哲男 (センター)

1月19日(木)

基調講演: ジェーン・パーバンク (ニューヨーク大学) 「帝国と変容: 差異の政治」

司会: 宇山智彦 (センター)

第1セッション: 帝国統治の構造と技術

マリア・ミスラ (オックスフォード大学) 「貴族と近代: 大反乱後のインド」

ウィラード・サンダーランド (シンシナティ大学) 「帝国のロシア的方式: カザン征服から1917年まで」

浅野豊美 (中京大学) 「近代日本における国民国家システムと帝国システム」

討論者: 松里公孝 (センター) 司会: 西山克典 (静岡県立大学)

第2セッション: 帝国と他者の相互関係と相互認識

宇山智彦 (センター) 「帝国への招待・適応・抵抗: 中央アジアの場合」

川島真 (東京大学) 「民国期中国における伝統的世界秩序・朝貢観」

ルディ・マテー (デラウェア大学) 「黄金と武力: 貢納制帝国としての後期サファヴィー朝」

討論者: 長縄宣博 (センター) 司会: 守川知子 (北海道大学)

1月20日(金)

第3セッション: 帝国崩壊と国家再編: 遺産と変化

ファトマ・ミュゲ・ギョチェク (ミシガン大学) 「オスマン帝国の遺産」

池田嘉郎 (東京理科大学) 「共和制の帝国に向かって: 総力戦、革命、ナショナリズムの時代におけるロシアの変容」

アディティア・ムカジー (ネルー大学) 「植民地主義の脱構造化: ネルー時代と非同盟」

討論者: 半澤朝彦 (明治学院大学) 司会: 秋葉淳 (千葉大学)

第4セッション：脱植民地化の地域的・国際的意義

秋田茂（大阪大学）「南アジア脱植民地化後におけるネルー政権の経済外交」

チアン・ジャイ（オーバーン・モントゴメリー大学）「バンドゥンへの道：脱植民地化に対する中国のアプローチの展開」

菅英輝（西南女学院大学）『『アメリカ帝国』の形成と冷戦時代初期の脱植民地化への対応』

討論者：デイヴィッド・ウルフ（センター）；ムリドゥラ・ムカジー（ネルー大学）

司会：粟屋利江（東京外国語大学）

第5セッション：新しい帝国？米国と中国

ロブ・クルース（アムステルダム大学）「アメリカ：帝国の中の帝国？」

蔡東傑（中興大学、台湾）「中国は帝国になりつつあるのか？ 戦略的伝統とあり得る選択」

討論者：古矢旬（東京大学） 司会：田畑伸一郎（センター）

総合討論

司会：宇山智彦（センター）

◆ 第5回全体集会開かれる ◆

国際シンポジウムに引き続き、1月21日（土）午後には、新学術領域研究第5回全体集会「最終成果の出版に向けた報告会」が開かれました。本全体集会では、プロジェクトの最終成果となる出版物『ユーラシア比較地域大国論』（全6巻）に収められる予定の2本の論文を取り上げ、それぞれの執筆者によって、他のメンバーの前で報告がおこなわれました。各報告の後には、討論者のコメントに続いて、フロアからも積極的な意見が出され、出版物の大まかな方向性について、各自で確認がおこなわれました。[後藤]

報告：1. 松里公孝（センター）・中溝和也（京都大学）「民族領域主義と連邦制」

コメンテーター：山根聡（大阪大学）

2. 王柯（神戸大学）「『公共空間』という戦略：ムスリムとして中国に生きる」

コメンテーター：安藤潤一郎（東海大学）

◆ 外国人研究員の採用 ◆

新学術領域研究第1班外国人研究員の募集に対して、複数の応募者の中から厳選な審査の結果、モニカ・チャンソリア氏（Monika Chansoria）〔土地戦争研究センター、Center for Land Warfare Studies (CLAWS), New Delhi〕の採用が決まりました。氏はインドと中国の軍事外交に関する国際関係をテーマとして、アジアにおける中国プレゼンスの影響力について研究されています。1月5日から3月13日までセンターに滞在しながら、様々な研究活動に従事される予定です。

また第6班の外国人研究員として、エレナ・イコンニコヴァ氏（Elena Ikonnikova）〔サハリン国立大学〕を招聘することが決まりました。イコンニコヴァ氏は比較文学・文学理論を専門としており、主としてサハリン・樺太に関わる日露の文学について研究されています。1月28日から3月28日までセンターに滞在します。[越野]

◆ 比較地域大国論集第7号『比較帝国論の世界』の刊行 ◆

比較地域大国論集第7号として、宇山智彦編『比較帝国論の世界：新学術領域研究第4班中間成果』が刊行されました。下記3本の論文のほか、第4班が開いた研究会のうち15回分の概略と、大半の報告のレジюмеを収録しています。多くの論客による多様な帝国論の世界をお楽しみください。本書は、新学術領域研究ウェブサイトの出版のページからダウンロードできます。[宇山]

- 宇山智彦 帝国の弱さ：ユーラシア近現代史から見る国家論と世界秩序
岡本隆司 「主権」の形成：20世紀初頭の中国とチベット・モンゴル
森まり子 民族自治から主権国家へ：帝国解体期のシオニズム運動における民族分離主義の変容 1881
～1948



グローバルCOE

◆ 冬期国際シンポジウムの開催 ◆



国際シンポジウム参加者：北大総合博物館入口で

11月26日、北大グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」は、スラブ研究センターと共同して冬期国際シンポジウムを開催しました。GCOE主催としては3回目となる本シンポジウムは、岩下拠点リーダーによる基調演説に続き、例年通り冒頭に理論セッションを置き、地域・テーマ別に「東南アジア地域の境界と開発」、「分断された空間」セッションという構成になりました。理論セッションでは、北米から、トニー・パヤン氏、ヨーロッパからはジェームス・スコット氏という、世界の境界研究をリードする研究者をお招きしました。北米は米墨（合衆国/メキシコ）、米加（合衆国/カナダ）という、境界研究が最も注目する国境を抱えており、またヨーロッパはEU統合により、境界が新たに引き直されている地域です。両氏とも、個別の事例紹介にとどまらず、理論や比較を考慮しない従来の「境界研究」を鋭く批判しました。続く「東南アジアにおける境界と開発」セッションでは、英語圏の研究者によるメコン川のダム問題、インド北東部の人口移動問題の報告がおこなわれました。いずれも詳細な現地調査に基づき、情報豊富な、現場の空気が伝わってくるような報告となりました。



「激論 北方領土問題」のもよう

また、「分断された空間セッション」では、エルサレム、モスタル（ボスニア・ヘルツェゴビナ）、アイルランド、沖縄についてそれぞれの専門家が報告をおこないました。エルサレムについては、報告者のヤコビ氏が家族の事情で不参加となり、今野泰三氏（大阪市立大学）が自らの研究を元にして、エルサレム市内の分断の様態を報告しました。モスタルの報告では都市

建築学の観点から、アイルランドは長い分断の歴史から、沖縄は近年の海兵隊基地移設問題の観点から報告がなされました。一方で、討論者からは、世界中の同様の現象と比較するための拠り所や手法を考慮すべきではないか、とのコメントが出されました。こうした議論は、比較政治学からの地域研究に対する批判と似ており、地域研究を生業とするスラブ研究センターにとっても意味あるものでした。シンポジウムでは日英同時通訳が提供され、一般市民も境界研究の議論に聞き入っていました。

シンポジウムの翌 27 日には、本 GCOE 主催により、中村美彦氏（フリージャーナリスト）を司会に、金平茂紀氏（TBS キャスター）らをパネリストに据えた公開討論会「激論 北方領土問題 現場からの眼差し」が札幌エルプラザ内ホールで開かれ、150 名余りの市民が、ロシアと根室の事情に精通した専門家達による討論に耳を傾けました。

また、シンポジウム開催と併せて、25 日には若手研究者によるプレ・シンポジウムが、27 日には境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 設立のための実務者会議が開かれました。
[藤森]

研究の最前線

◆ スラブ諸語研究国際会議 ◆

「スラブ諸語における文法化と語彙化」開催される

2011 年 11 月 11 日(金)～13 日(日)まで、スラブ研究センターにて上記国際シンポジウムが開かれました。このシンポジウムは、センターと国際スラヴィスト会議スラブ諸語文法構造研究部会（以後「部会」）の共催で、2011 年度の北海道大学総長室経費を中心に、本学 GCOE「境界研究の拠点形成 スラブ・ユーラシアと世界」、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 6 班、日本西スラヴ学研究会、日本スラヴィスト協会の後援をうけて組織されたものです。



会議のようす

当シンポジウムの主眼は、今日の言語学で盛んに議論されている「文法化」と「語彙化」という側面に焦点をあて、スラブ諸語の文法構造の変化のパターンを、共時的、通時的、複数言語の比較対照、言語接触論、言語類型論といった様々な方法で分析し、論じるものでした。

シンポジウムには、上記部会の委員を中心に、世界 15 ヶ国から参加した 25 人の報告者による合計 6 つのセッションと、2 本の基調講演、1 つのテーマセッションがおこなわれました。これは、本邦初となる本格的なスラブ語研究の国際シンポジウムで、ユーリー・アプレシヤン、エレナ・パドゥッチェヴァ、ヴィクトル・フラコフスキーといったスラブ諸語文法研究会のいわば「銀河系軍団」と日本人研究者が交流、意見交換する大変貴重な機会にもなりました。今後のさらなる交流、そして共同研究への発展が期待されます。



報告者を中心とした集合写真

11日の第1部は、国内外からの公募による研究報告で、日本からの参加者を中心に査読を経て選ばれた7人の研究者が報告しました。12日と13日は、部会のメンバーによる定例研究集会がおこなわれました。尚、定例研究会に先立ち、日本のスラブ語研究を長年にわたって牽引してこられた佐藤純一名誉組織委員長（東京大）から、日本のスラブ語研究の歴史と課題についての特別講演があり、また12日には三谷恵子先生（京都大）、13日には服部文昭先生（同）が基調講演をおこないました。

シンポジウム後の14日は、小樽近郊に遠足に行きました。遠足では、越野剛氏（センター）の見事なガイドと解説に、どの参加者も興味深く耳を傾け、北海道の文化と歴史に興味津々といった様子でした。

このシンポジウムの報告論集は、プレドラグ・ピペル（ベオグラード大）、アンドリイ・ダニレンコ（ペイス大）、野町素己（センター）を編集委員とし、ドイツのOtto Sagner社から出版を目指し作業を進めています。

シンポジウムの組織にあたり、関係者の方々に大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。報告者は以下の通りです。[野町]

Eleonora Shii-Iovkova (Kanda International University of Foreign Studies, Japan) "Grammaticalization and the Bulgarian -I Participle: Semantic-Functional Shift from Tens Aspect to Modality"

Jan Ivar Bjørnflaten (University of Oslo, Norway) "Construction-Induced Grammaticalization: Agreement Loss and Decategorialization of Predicative Participles in Old Church Slavic"

МАРУЯМА Юкико (Токийский университет иностранных языков, Япония) "Употребление дуальных форм в житийных текстах старорусского периода: грамматические и лексические факторы"

Судзуки Рина (Медицинский университет Саппоро, Япония) "Русские предлоги и предложные единицы"

КАНЭКО Юрико (Университет Иватэ, Япония) "Функционирование аспектуальных доминант в повествовательных текстах: на материале русского и японского языков"

Romuald Huszcza (University of Warsaw / Jagiellonian University in Cracow, Poland) "Grammaticalization of Honorifics in West Slavic Languages"

Andriy Danylenko (Pace University, USA) "Ukrainian in the Language Map of Europe"

MITANI Keiko (Kyoto University, Japan) "On MIMO: A Consideration on Lexicalization in Slavic"

Борис Норман (Белорусский государственный университет) "Развитие притяжательных местоимений 3-го лица в славянских языках в свете процессов грамматикализации"

Розанна Бенаккьо (Падуанский университет, Италия) "Грамматикализация в ситуациях языкового контакта: развитие артикля в резьянском диалекте"

Предраг Пипер (Белградский университет, Сербия) "О грамматикализации сербских фемининативов"

Jens Nørgård-Sørensen (University of Copenhagen, Denmark) "Animacy in Russian: A Sub-Gender?"

Ljubomir Popović (University of Belgrade, Serbia) "A Case of Interplay of Discourse and Grammar and Discourse and Lexicon: The Use of Onomatopoeic Interjections in Serbo-Croatian and Other Standard Languages of Štokavian Origin"

- Greville Corbett (University of Surrey, UK) "Lexicalization and Paradigmatic Structure: Key Instances in Slavonic"
- Руселина Ницолова (Софийский университет им. Св. Климента Охридского, Болгария) "О взаимоотношении между формальными и семантическими изменениями при грамматикализации"
- Виктор Храковский (Институт лингвистических исследований РАН, Россия) "Статус значений, которые могут выражаться глагольными лексемами и грамматическими морфемами (значения быть и притворяться)"
- Ханну Томмола (Университет Тампере, Финляндия) "О показателях недостоверного (ирреального) сравнения"
- Ольга Богуславская (Институт русского языка им. В. В. Виноградова РАН, Россия) "Предельность и неопредельность русских прилагательных"
- НАТТОРИ Fumiaki (Kyoto University, Japan) "Grammaticalized or Not: Some Examples from the Early Old Russian Past Tenses"
- Елена Падучева (Всероссийский институт научной и технической информации РАН, Россия) "Ментальные глаголы совершенного вида и их стативные корреляты"
- Elena Petroska (University of Ss. Cyril and Methodius in Skopje, Macedonia) "Evidentiality in Macedonian (Grammaticalization and Lexicalization)"
- Номати Мотоки (Центр славянских исследований при Хоккайдском университете, Япония) "Языковой контакт и грамматикализация залоговой конструкции (на материале кашубского и других славянских языков)"
- Юрий Апресян (Институт русского языка им. В.В. Виноградова РАН / Институт проблем передачи информации им. А.А. Харкевича РАН, Россия) "Грамматика в словаре и словарь в грамматике"
- Адриан Барентсен (Амстердамский университет, Голландия) "Проблемы описания союза ПОКА"
- Игорь Богуславский (Институт проблем передачи информации им. А.А. Харкевича РАН, Россия / Мадридский технический университет, Испания) "О грамматикализации способов разрешения синтаксических конфликтов"
- Леонид Иомдин (Институт проблем передачи информации им. А.А. Харкевича РАН, Россия) "Микросинтаксис русского языка"

◆ 国際シンポジウム「EUの東方パートナーシップ：成果と展望」の開催 ◆

ラドスワフ・ティシュキェヴィッチ (駐日ポーランド共和国大使館参事官)

2011年11月30日に、東京の駐日ポーランド共和国大使館の主導により、EU委員会におけるポーランドの議長国行事として、スラブ研究センターで東方パートナーシップのイニシアティブの促進をテーマとした学術シンポジウムが開催されました。これは議長国としてのポーランドにとって最も重要な出来事の一つであり、EUの議長国としてのポーランドの最優先課題を促進するためのものです。

シンポジウムは、ポーランドをリードするシンクタンクから4人の

専門家を招聘し開催しました。それはベアタ・ヴォイナ氏 (ポーランド外交研究所)「東方パートナーシップ：稼働中の長期的戦略」、カタジナ・ペウチンスカーナウエンチ氏 (ポー



ポーランドの参加者

ランド東方研究センター)「パートナーシップからビジネスへ：経済プロジェクトとしての東方パートナーシップ」、ラファウ・サドフスキ氏(ポーランド東方研究センター)「東欧諸国の発展：EUと東方パートナーシップの課題と展望」、アダム・ヴァルツェル氏(ヨーロッパ戦略センター、デモス・ヨーロッパ、ポーランド)「東方パートナーシップにおける利害関係者としての第三国(ロシア、中国、アメリカ、トルコ等)」です。ポーランドの専門家たちの報告は、シンポジウムの参加者にとって東方パートナーシップというテーマでの非常に価値のある情報源となったようでした。

シンポジウムはスラブ研究センターとの共催でおこなわれ、きわめて専門的な内容となりました。参加者はおよそ20人ほどでしたが、主として日本の研究者で、スラブ研究センターで研究をおこなう外国人も参加していました。シンポジウムはとても興味深いディスカッションとポーランドと日本の専門家の間での意見交換で終わりました。日本側からの参加者には、2011年の秋にポーランドを訪問したばかりという方もいました。

東方パートナーシップのイニシアティヴは日本ではあまり知られていないプロジェクトです。札幌でのシンポジウムの主な目的は、このプロジェクトのこれまでの発展、最も近い将来への展望、東方パートナーシップの友好国のメンバーである日本との協力関係の可能性を背景に、日本で東方パートナーシップを促進することです。この主な目的は達成されたように思われます。そしてシンポジウムは、日本において東方パートナーシップが広まるための「最初の一步」となりました。札幌を訪問したことはポーランドの専門家たちにとっても、日本において東方パートナーシップを促進するための条件を知り、また日本そのものを知るためのいい機会にもなりました。

それほど遠くない未来に、東方パートナーシップのイニシアティヴの今後の促進が、日本のこの美しい北方の島で継続されることを願ってやみません。シンポジウムが終わった後、私は稚内、網走、知床、根室、釧路、ニセコそして小樽を旅しました。北海道が奇跡的なほど素晴らしい日本の一部であることを確信すると同時に、北海道の素晴らしい風景と人々の優しさに触れる機会を得たのでした。(佐光伸一訳)

◆ 2012年度「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」◆ に関する公募結果

12月10日の拠点審査委員会において、2012年度「スラブ・ユーラシア(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」に関するプロジェクト型共同研究および共同利用型個人研究に関する応募者を審査した結果、次の方々をお願いすることに決定いたしました。[望月]

2012年度採択者一覧

1. プロジェクト型

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
今西 一	小樽商科大学商学部・教授	北東アジアのコリアン・ディアスポラ
梅津 紀雄	工学院大学・講師	冷戦と音楽：ソ連の文化政策と作曲家表象
小椋 彩	川村学園女子大学・講師	東欧文学における「東」のイメージの形成と変遷：特に「移動の文学」に注目して
永山ゆかり	北海道大学大学院文学研究科・助教	北東ユーラシア地域における社会主義体制下のライフヒストリー研究：文化の管理と日常実践を中心に

2. 共同利用型

申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
加藤 久子	在ポーランド日本国大使館専門調査員	資源化する「連帯」の記憶：現代ポーランド政治のなかの労組「連帯」
坂中 紀夫	神戸市外国語大学大学院・博士課程	自己記述的文芸形式（「自伝・日記」）のロシア的特性
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系・助教	帝政末期ロシアのトルキスタン開発政策について：土地整理農業総局の活動を中心に
辻河 典子	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程	1910年代前半のルテニアにおけるギリシア・カトリック派知識人のハンガリー・ナショナリズム分析
鶴見 太郎	日本学術振興会特別研究員	亡命白系ロシア人としてのシオニスト：白系ロシアとユダヤ・ナショナリストの思想的関係
中澤佳陽子	東京大学大学院人文社会系研究科・研究員	フョードル・ソログープとその周辺
中野 幸男	日本学術振興会特別研究員	ヨーロッパと亡命ロシア文学の接点：マルク・スローニムについて
白村 直也	東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター・研究員	現代ロシアの社会福祉・教育政策における手話の位置づけに関する考察
初山 昌夫	神奈川県立近代美術館・主任学芸員	スラブ・ユーラシア美術の日本における受容史について
山下 大吾	京都大学・講師	プーシキンの作品における西洋古典文学の影響

◆ 2012年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度を利用して、これまでに多くの大学院生がスラブ研究センターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2012年度も昨年同様に募集をおこないます。募集人数は数名とし、助成対象者は原則として博士後期課程以上の大学院生です。助成期間は1週間以上3週間以内です。滞在期間は、原則として2012年7月から2013年2月の間。センターの行事をご勘案の上、決めていただければと思います。最終的な日程の調整は、ホスト教員とおこなうことになります。滞在中に一度、自身の研究について発表することが義務づけられます。

公募締め切りは4月末です。募集要項・応募用紙をご希望の方はセンターまでご連絡ください。なお、募集要項・応募用紙はセンターのホームページでも参照およびダウンロードできます。[野町]

◆ ノゴイヴァエヴァ氏の滞在 ◆

クルグズスタン(キルギス)の“Polis Asia”分析センター長であるエルミラ・ノゴイバエヴァ(Elmira Nogoibaeva)氏が、2012年1月17日から3月12日までの予定で、国際交流基金知的交流フェローシップ事業によりセンターに滞在しています。研究テーマは「クルグズスタンと日本の政治エリートの比較分析」です。同国で活躍中の政治学者で、日本の研究者との交流が期待されます。[宇山]

◆ 専任セミナー ◆

専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2012年1月13日：田畑伸一郎「2000年代のロシアの経済発展メカニズムについての再考」
センター外コメンテータ：上垣彰（西南学院大学）

資源大国であるロシア経済は「オランダ病」を患い、原油輸出はかえってロシアにおける国内産業の発展にとって足かせとなっていると理解されてきました。それに対して近年、国内産業も同時発展している兆候もあり、オランダ病というよりはロシア病であるという見方が出ています。田畑氏はこれに対して統計的な分析だけでなく、政策分析なども用いて、総合的に見ればロシアは基本的にオランダ病を患っているとする通説擁護の議論をこの論文で展開しました。討論者の上垣氏は田畑氏の議論を踏まえたうえで、ロシア経済の宿痾は何かを問う必要があるのではないかと、また他の資源輸出国家との比較も考慮し、全体としてオランダ病とロシア病を統合するようなロシア経済論の仕事を田畑氏に期待するというコメントがなされました。

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 127号以降1月末までの、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

- 10月31日 花松泰倫（センター）「アムール川とオホーツク海の陸海統合管理：北東アジア地域環境協力の可能性」（GCOE-SRC 研究員セミナー）
- 11月1日 高橋知之（東京大・院）「若きプレシチューエフとユートピアの希求：1840年代における詩と散文の分析」（鈴木中村研究員セミナー）
- 11月2日 E. グチノヴァ（国際交流基金フェロー、ロシア）「ソ連の労働キャンプにおける日本兵捕虜の視覚的記憶（ロシア語）」（センター・セミナー）
- 11月7日 K. ナドネエヴァ（カルムイク国立大、ロシア）「カルムイクシアにおける仏教（ロシア）」（センター・セミナー）
- 11月10日 P. ピペル（ベオグラード大、セルビア）「ロシア語とセルビア語の対比研究について（ロシア語）」（センター特別セミナー）
G. コーベット（サリー大、英国）“Canonical Typology and Slavonic Lexical Splits”（GCOE-SRC 特別セミナー）
本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）「活発化するロシアの北極圏の資源開発」（センター・セミナー）
- 11月21日 亀田真澄（学振特別研究員）「共産主義プロパガンダにおける宗教文化の流用：グラフ誌『ユーゴスラヴィア』を中心に」（GCOE-SRC 特別セミナー）
- 11月24日 U. セリテエフ（ユーラシア大・院、カザフスタン）「国会選挙を控えたカザフスタン内政の基本的動向と政党空間（ロシア語）」（センター・セミナー）
- 11月28日 宇都宮徹壱（写真家・スポーツジャーナリスト）「国境とフットボール」（GCOE-SRC 特別セミナー）
- 11月29日 I. レインホルド（ラトヴィア大）“Economic Reform after the Financial Crisis in Latvia”（新学術セミナー）
- 12月1日 井上暁子（センター）「ドイツ／ポーランドのはざまで：20世紀越境文学の知られざる風景」（GCOE-SRC 研究員セミナー）

- 12月3日 一緒に考えましょう講座「フクシマと私たち」 山口たか（福島の子どもたちを守る会）「福島の子どもたちと共に生きる」
科研（基盤B）「北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割」研究会
藤村久和（北海学園大学名誉教授）「樺太アイヌの引き揚げについて」
- 12月5日 D. アブラハム（外交問題評議会フェロー / 東京大）“Perspectives on Natural Resource Security: Rare Metals and the Battle for Resources”（新学術セミナー）
- 12月10日 SRCプロジェクト型共同研究中間成果発表会 横手慎二（慶応義塾大）「北東アジア地域における第一次世界大戦」；等々力政彦（トゥバ民族音楽家）「ロシア連邦・トゥバ共和国および台湾に保存されているトゥバ古地図のデータ化に向けての基礎調査」
- 12月12日 黒田晴之（松山大）「東欧ユダヤ人の音楽クレズマー：異種との接触の合間で」（GCOE-SRC 特別セミナー）
- 12月14日 安達大輔（学振特別研究員）「ゴーゴリと写真の記憶」（世界文学研究会）
- 12月15日 山崎佳代子「桜と詩人ツルニャンスキー：日本古歌とセルビア前衛詩の出会い」（新学術セミナー）
- 12月16日 A. カシアノヴァ “Between .ru and .com: Online Self-representation of Russian Defense Companies”（センター・セミナー）
- 12月17-18日 シンポジウム「帝国日本研究の方法と課題」 石原俊（明治学院大）「小笠原諸島からみた帝国の構成：日本帝国を中心に」；塩出浩之（琉球大）「ヒトの移動とコロニアリズム：帝国日本を中心に」；與那覇潤（愛知県立大）「荒れ野の六十年（1894-1953）：東アジアの『長い近代』と帝国日本」
- 12月21日 机文明（法政大・院）「中ソ同盟と対日講和」（鈴木中村研究員セミナー）
麓慎一（新潟大）「ロシア領アメリカ（アラスカ）の売却と千島列島」（客員研究員セミナー）
- 1月7日 科研（基盤B）「北海道多文化共生におけるサハリンからの移住者の役割」研究会
中山大将（京都大）「戦後サハリンの人口移動：帝国・国民国家・家族」；玄武岩（北大・メディア）「『尋ね人』番組のネットワークーサハリンと故郷を結ぶ『離散家族探し放送』」
- 1月10日 T. コルトン（ハーヴァード大、米国）“Are Cracks Appearing in Putin’s Political System?”（センター・セミナー）
- 1月21日 B. キム（ソウル大、韓国）“Russia’s Informal Economy and Entrepreneurship”（新学術セミナー）
- 1月23日 森口眞衣（北大・文・院）「仏教説話『王舎城の悲劇』の変遷と受容：日本社会との接点」（世界文学研究会）

アナトリー・レムニョフ氏を悼む

宇山智彦（センター）



2007年夏期シンポジウムで報告するレムニョフ氏

2007年度にセンター外国人特任教授を務めたアナトリー・レムニョフ（Anatoly Viktorovich Remnev）氏が、2012年1月24日、病没されました。まだ56歳の若さでした。

レムニョフさんはロシア帝国史、特にシベリア・極東史の専門家で、『専制とシベリア』（1995、1997）、『極東のロシア』（2004）、『専制政府』（2010）など多くの著書があります（『極東のロシア』については『スラヴ研究』第55号掲載の左近幸村氏の書評参照）。欧米とロシアのロシア帝国論の成果をまとめた *Russian Empire: Space, People, Power, 1700-1930* (2007) の共編者としても知られています。

2005年に彼の50歳を記念する600頁の論文集が出されたほどの大家ですから、2007年に初めてお会いした時、私はかなり緊張していました（2003年に原暉之先生が組織したシンポジウムに来られた時は、私はモスクワにいてすれ違いになっていました）。しかしお会いしてみると大変気さくで親切な方で、私の関心と接点のある文献の電子ファイルをたくさんプレゼントしてくださいました。若手を含む各国の関連研究者の成果に常に目を配り、生産的な議論・対話をする人で、私や松里さんの研究に反応する形で書かれた論文もあります。2007年度冬期シンポ「アジア・ロシア」は、レムニョフさんの研究蓄積と助言からさまざまなヒントを得なければ開けなかったと言っても過言ではありません。センター関係の大学院生向けの講義でも、学生の質問に親切に答え、文献を紹介して下さったとのことでした。

レムニョフさんはレニングラードで学位を取得しましたが、教員としては一貫してオムスク国立大学で仕事をしていました。モスクワとサンクトペテルブルグの二極集中的なロシアの学界にあって、オムスクを拠点にノヴォシビルスク、チュメニなどシベリア各地の研究者と緊密に連携し、*Ab Imperio* 誌などを通じてロシア全国の研究ネットワークでも重要な役割を果たし、欧米や日本の研究者の間でも広く知られる、稀有な存在でした。研究方法としては、大量の史料に基づく実証分析と言説分析を併用し、西側の研究手法を意欲的に取り入れながら、ロシア帝国の権力構造を地理的な視点で解明して、近年のロシア帝国論の発展に大きく貢献されました。ロシア帝国期にオムスクのステップ総督府を拠点に統治されていたカザフ草原の歴史にも深い関心を寄せ、カザフスタンの研究者から尊敬を集めていました。

外国人特任教授の任期終了後もさまざまな形でセンターの活動に協力して下さり、私を含むセンターの教員はつい最近まで、2007年度冬期シンポに基づく論文集（ラウトレッジ社から刊行、センターニュース前号参照）や *Acta Slavica Iaponica* の編集の関係で、レムニョフ氏とメールのやりとりをしていました。これからまだまだ教えていただきたいことがあったのに、残念でなりません。昨年9月には、今年度冬期シンポに招く予定だった冷戦史研究者イリヤ・ガイドゥク氏が50歳で亡くなるという悲しい出来事がありましたが、ロシアの優れた歴史家の相次ぐ早すぎる死に、嘆息するばかりです。心からご冥福をお祈り申し上げます。

レムニョフ氏追悼文

野田 仁（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

ロシア帝国期のシベリア研究で多くの業績を残したレムニョフ氏の訃報を聞いて大変驚いている。その年齢からしても、また近年の仕事量から見ても、さらなる活躍をされるだろうと思っていただけに残念なことしきりである。やや遠い中央アジア史の研究という立場からではあったが、私は氏と知己を得て、勤務先のオムスク国立大学（OmGU）を訪ねた経験がある。そのことについて記しておきたい。

センターに滞在されていたレムニョフさんを札幌に訪問したのは、2007年の夏であった。翌08年初めにオムスクで資料調査をしたいと考えていたからである。氏の日本滞在は年度末までであったにもかかわらず、招聘についてOmGUのスタッフに連絡することを快く引き受けてくださった。またこの時のロシア帝国のカザフ草原統治についての議論は、有意義なものであったことをよく覚えている（このとき初対面のつもりだったが、どうもモスクワやカザフスタンの文書館で遭遇していたらしい。氏の観察力はここにも発揮されている）。

年も明けて寒さ厳しい1月末のオムスク空港で迎えてくれたのは、ご子息のパーシャだった（彼もまたOmGUでロシア史を専攻し、その後も研究を続けている）。結局、1月半の滞在中、すべてをレムニョフさんのご家族とOmGUの関係者にお世話になってしまった。そもその住まいからして、大学の寮をお世話していただいた。OmGU周辺をうろつく間に気がついたのは、氏は教育者としても非常に精力的に研究者を育てつつあったことである。私が直接会ったN. G. Suvorova, V. V. Vorob'ev, E. V. Bezikonnaiaといったロシア史研究者たちは、レムニョフさんに薫陶を受けた人々だった。OmGUを中心に、レムニョフさんらは様々な会議を開き、その成果を報告集としてまとめていたが、そこで興味深いのは、カザフスタン—とくに北部カザフスタン—の大学との交流・共同研究である。とくに、“Stepnoi krai”という空間を冠する一連の国際会議の報告集を手にして、オムスクあるいは西シベリアの、ロシア帝国内における地理的な位置を再認識するにいたった。このような、たんに現在のロシアにおけるシベリアという枠組みに限定せず、カザフ草原、中央アジアも含めてひろく考察を行う姿勢は、レムニョフさん（およびその講座のメンバー）の広い関心と学識によっているのではないかと感じたように記憶している。

日本に戻ってから、逆にオムスクに戻られる直前のレムニョフさんをお連れして東京周辺をめぐることができたのは幸いであったし、思えば直接お目にかかった最後の機会となった。しかしながら、すでに述べたように、その学統は若い世代に引き継がれ、さらに発展するものと信じている。レムニョフさんのご冥福をお祈りするばかりである。

The 5th Indo-Japanese Dialogue on “The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy” 参加記

星野 真（センター）



向かって右側から報告順に居並ぶ報告者（日本側）

2011年12月26日～27日、インド、ジャワハルラール・ネルー大学（JNU）ジャワハルラール・ネルー高等研究所（JNIAS）において、JNIASと北海道大学スラブ研究センターとの共催のもと、第5回日印対話“The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy”が開催されました。このカンファレンスでは、BRICs各国をフィールドとする経済学者から各国経済を対象とした報告が行われ、BRICsのうち2カ国以上を比較した分析も多数みられました。40名を超える参加者は、各国経済

のもつ固有性への理解を深め、BRICsが日欧米に代わりうる新たなモデルを提示しうるか検討できる端緒を開いたと思われまます。

カンファレンスのために会場を提供し、準備に当たっていただいたJNIASのスタッフ各位、裏方作業を担っていただきました伊勢司（バラナシヒンドゥー大学・院）、加えて農村訪問をアテンドしていただいた岡本聡子（Institute of Rural Research and Development, IRRAD）、そしてカンファレンス全般の運営から報告までこなした佐藤隆広（神戸大学・ジャワハルラール・ネルー大学）に厚く感謝申し上げます。なお、本カンファレンスは新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」、ディナーセッションはIRRADからの支援を受けていることを記しておきます。

カンファレンス 3つの特徴

本参加記では、まず本カンファレンスの特徴を3点指摘することを通して、簡潔にカンファレンスを振り返りたいと思います。

第一に、文字通りに日本とインドの対話という形式をとっていることです。二日間のカンファレンスで、報告者は19名、司会者と討論者は11名ののぼりませんが、報告者は全て日本人であり、そして司会者と討論者は全てインド人でした。ほとんどの討論者は、事前に提出されたペーパーを読み込んだ上でカンファレンスに臨んでおり、質疑応答では経済理論の解釈・計量経済学的手法・データの扱いなど具体的で詳細な質問が続き、濃密な学術的対話が行われました。

日本側とインド側の対話が成功した背景に、経済学が双方の共通言語であったことが大きく作用していると思います。実際の報告では国際経済、財政、金融、政治経済、経済成長、生産性、資源、環境、経済史、産業、貧困、所得分配、労働、教育、といった多様なトピックスが取り上げられました。一方の分析ツールは、計量分析、制度分析といった標準的なものでした。

また、このような幅広いテーマにもかかわらず、先述のように報告者に的確なコメントが寄せられたのは、佐藤隆広の巧みなオーガナイズにより、定評ある各分野の専門家が、各セッションの司会者と討論者を担ったことも挙げられます。こうして、日印対話がより深まったと感じられました。

第二の特徴は、BRICs 各国の経済を研究対象としている研究者による報告が行われたことです。19名の報告者のうち、ブラジル経済研究者は2名、ロシア経済研究者は4名、インド経済研究者は9名、そして中国经济研究者は4名で構成されています。2003年に、ゴールドマン・サックスが、ブラジル・ロシア・インド・中国の飛躍を予想し、BRICsの語源になったペーパー“Dreaming with BRICs: The Path to 2050”を発表してから、BRICsをテーマとしたシンポジウムやカンファレンスが数多く開催されていますが、BRICs 各国経済を専門とする19名の日本人研究者が、BRICsの現地一堂に会し、BRICsを母国とする研究者からコメントをもらうというカンファレンスは、きわめて珍しく、意欲的な試みと思われます。

この挑戦が実り多きものに終わったのも、繰り返しになりますが、BRICs 各国を対象とした経済学的分析の報告であったことが作用しています。もちろん一つの経済理論や方法論で、経済システムや発展の初期条件が異なる各国を一刀両断に分析することに難しいところはあっても、フレームワークや方法論が既知で共通のものであるからこそ、各国経済を対象とした研究成果を理解し、その国の経済の特殊性を比較しやすくなるという利点もあります。この点は、第三の特徴に関係してくるため、次で述べたいと思います。

最後に、第三の特徴は、BRICs 4カ国のうち2カ国以上を比較した研究報告が複数行われ、日本側のBRICs 各国経済研究者や、インド人経済学者への刺激になり、地域大国のモデル検討の議論がさらに深まったことです。19名中7名の報告者が比較を試み、そのうち4名は新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」のテーマ通りにロシア・中国・インドの比較研究を発表し、そのうちさらに1名はブラジルも加えて4カ国を比較しました。これら7名はいずれもインド経済を専門としない研究者でしたが、比較分析から明らかにされたインド経済の相違性と共通性が、インド側の強い関心を引きました。そして、セッション内外で、自らが専門としない国の分析方法やBRICsの発展モデルについての意見交換がされました。

この第三点は、Closing Remarkで、田畑伸一郎（新学術領域研究領域代表者・北海道大学）が述べました、われわれのプロジェクトが目指すところでもあります。すなわち、新学術領域研究の狙いはBRICs 各国経済を分析することや各国を比較することだけにあるわけではありません。その狙いとは、これらの分析を通して、BRICs 各国の共通性と相違性を見出し各国の固有性を深く理解し、次いでBRICs 各国の経済発展が日欧米に代わる新たなモデルを提示しているのか検討し、そして長期的な時系列の中で冷戦後のBRICs 各国の発展と台頭を位置づけるというものです。このカンファレンスは、これらの問いを考察するための多くの示唆に富んでいたといえましょう。

各セッションの概要

続いて、カンファレンスの各報告をセッションごとに要約します。

なお、正式な報告タイトルは別途公開されているプログラムをご覧ください。また、今回発表された報告の一部は、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」のディスカッション・ペーパーとして2012年中に公開され（予定）、さらに国際的学術雑誌へ投稿されます。詳細な研究成果をご覧になりたい方は、ぜひご参照ください。

まずOpening RemarkではJNU・JNIAS所長であるAditya Mukherjeeと、JNU副学長であるSudhir Kumar Soporyから挨拶をいただきました。

Keynote Speechでは、田畑伸一郎が“Growth in the International Reserves of Major



飲用水を汲む農村住民

Regional Powers: Comparisons of Russia, China, and India”と題して、ロシア・中国・インドの比較研究を発表しました。氏は為替相場の維持という目的と外貨準備高の蓄積のメカニズムという三国の共通点と相違点を指摘した後、グローバルインバランスの状況はしばらく持続する一方でこのシステムを維持するためのコストは増大していくだろうと論じました。これに対して司会者やフロアからは、グローバルインバランスのコストや、比較にブラジルも加えたらどうか、といった質問がなされました。

続いて、マクロ経済のセッションでは、上垣彰（西南学院大学）、梶谷懐（神戸大学）、金野雄五（みずほ総合研究所）、福味敦（東海大学）が報告し、それぞれ、発展モデルの中露比較、流動性と資産バブルの中印比較、1990年代における中印露の貿易自由化、インドの発電補助金と政治的安定性をテーマとしました。討論者やフロアからは、分析モデルやデータについてのほか、比較対象国での共通点が問われるなど、比較研究独特の議論もみられました。セッション後、カンファレンスルームの隣にある開放的なテラスで、ピュッフェ形式のインド料理がふるまわれ、参加者はしばしの休息を楽しみました。

昼食後、生産性のセッションが開始されました。このセッションでは、西島章次（神戸大学）はブラジルを、藤森梓（大阪成蹊大学）と加藤篤史（青山学院大学）はインドを対象に製造業の生産性を報告しました。この研究分野は、近年の企業データの公開とともに急速に研究が発展しているためか、企業の競争性をどう計測するかといったことから、データや操作変数など多くの質問が出され議論がつきませんでした。

1日目最後のセッションのテーマはエネルギーであり、堀井伸浩（九州大学）は中国の石炭産業、本村真澄（独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構）は日本から見たロシアの原油・天然ガスの必要性を論じました。それに対して技術面に関する質問のほか、インドは中国ほど資源を浪費しない、アメリカとブラジルのバイオエネルギーの相違など、BRICsカンファレンスならではのコメントが出されました。

エネルギーセッション終了後、ワインとオードブルがふるまわれ、その後、テラスでレセプションが始まりました。

2日目のセッションは経済史から開催され、佐藤隆広がインド独立以後のマクロ経済を、脇村孝平（大阪市立大学）は19世紀後半のインドの飢饉と疫病を報告しました。討論者とフロアとの間で、産業別の成長や外生的ショック、コロニアルとグローバリゼーションなどについて論じられました。

産業セッションでは、石上悦朗（福岡大学）がインドの鉄鋼業、上池あつ子（甲南大学）・佐藤隆広・Aradhna Aggarwal（デリー大学）がインドの製菓業の生産性、丸川知雄（東京大学）が中国の太陽電池産業を論じました。石上はパンジャブにおける鉄鋼業の写真を、丸川は自宅に設置した太陽電池パネルの写真をみせ、上池は生産性の推計を丁寧に紹介し、聴衆の関心を大きくひきました。フロアからは原材料、新技術、政府の役割などの質問が出されました。

最後に貧困・不平等セッションが行われました。山崎幸治（神戸大学）はインドの貧困削

減、星野真（北海道大学）は国内地域経済収束性の BRICs 比較、野村友和（神戸大学）はブラジルの男女間賃金格差、そして二階堂有子（武蔵大学）・Jesim Pais（Institute for Studies in Industrial Development）・Mandira Sarma（ジャワハルラール・ネルー大学）はインド中小企業の金融アクセスを報告しました。定量的な分析だったこともあり、分析方法やデータに関する質問が中心となりました。

Closing Remark では、田畑伸一郎が、前述したように、今回のカンファレンスと新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の目的について述べ、結びとしました。

その後、IRRAD 支援によるディナーセッションが始まり、Jane Schukoske（Institute of Rural Research and Development）からインド農村と IRRAD の取り組みについて紹介があり、岡本聡子（IRRAD）によるインド農村のビデオ上映をみながら、ディナーが始まりました。一同、打ち解けた雰囲気でもビデオを鑑賞し、BRICs 比較研究の議論に花を咲かせたのでした。

現地視察より

カンファレンス翌日、参加者の多くは、エネルギー資源研究所（The Energy and Resources Institute, TERI）でのヒアリング調査と、ハリヤーナ州の農村調査のいずれかに参加しました。

農村調査は、IRRAD のアテンドで行われました。われわれが訪れたのは、デリーから南に 50km ほど行ったところにあるハリヤーナ州メワット県。ちょうどカラシナが満開で、菜の花が咲き乱れる春先の中国農村をほうふつとさせる光景でした。ほかにトマト、ニンジン、ナスが栽培されており、ナスは日本のそれと異なりソフトボールのように丸々としていました。訪問先の学校では、児童がアルファベットや掛け算九九を一斉に発音する風景に参加者一同は目を細めました。一方で



ロシア東欧経済研究者とラテンアメリカ経済研究者が
インドのスーパーを視察

飲用水の確保、産婆派遣所、子供の多さから、インドの貧困問題の深刻さと特殊性も感じ取られました。個人的には、農村調査に地方政府の姿がほとんどみえなかった点が新鮮でした。

カンファレンスが開催されたジャワハルラール・ネルー大学の近くには、近年新興国で急増しているショッピングモールがあります。多くの参加者は自ずと足を運び、インド経済の多様な側面をブラジル・ロシア・中国と比較しながら、ショッピングモールでの品物の種類・製造元・価格・客層を視察しました。全体的には、食料品は比較的安価ですが、工業製品はそれほど安くはない印象を受けました。また持参したラップトップとデジカメの型番をスーパーの受け付けで登録するという点は独特でした。参加者からは、モスクワのショッピングモールの方がはるかに大きい、インド産の農産物が豊富、所得階層別にモールが造られているとの声もありました。

他国をフィールドとする経済学者と現地視察を行い、他国を基準とした指摘に学びつつ、同時に自らの経済学者としての価値観を相対化することが、共同比較研究の醍醐味の一つといえましょう。

（文中、敬称を略させていただきました）

ワシントン DC 出張報告



20日朝からおこなわれたパネル“Comparative Analysis of the Russian Economy in Eurasian Perspective (2)”

せていたのだが、今年は幸いにもこの時期の出張が可能となった。17日から21日までの大会で、興味深いパネル（セッション）がぎっしり詰まっていた。初参加ということもあってか、論文は読んでいるがこれまでその姿を目にしたことがない研究者の話を生で聞けるという楽しさもあり、プログラムを手にしながらどのパネルに行こうかワクワクと迷いっぱなしだった。（行きたいパネルが決まったにもかかわらず、開催会場のつくりが複雑で、目的地にたどり着くのにも迷ってしまったが…）特に楽しみにしていたパネルは朝一のものが多かったが、8時開始にもかかわらず、どれも盛況だった。

さて、自身のパネル報告について。これには心配事項が二つほどあった。一つ目はプログラムに急きょ変更が生じたこと。パネル（“Politics in Regional Powers: Russia, China and India”）は3つの報告によって構成され、もともと私は「ユーラシア地域大国の比較研究」の成果として大阪経済法科大学の大串敦さんとの共著ペーパーの共同報告を予定していた。だが、直前になり同じパネルで報告を予定していた研究者の方が諸般の事情により参加が難しくなったため、代わりに私が一つ独立した報告をすることになってしまった。突然の展開にうろたえながら、なんとか持ちネタ（最近やっと出版できた単著）をベースにしたもので対応することができた。二つ目の心配事はパネルの日時だった。幸か不幸か最終日の最終時間帯に割り当てられたのだ。最終日が日曜日だったので、多くの参加者は報告や討論などそれぞれの出番を終え、帰路に向かう人々が多かった。しかも裏番組で相当面白そうなパネルが同時並行であり、最終日まで残った聴衆がそちらのほうに流れることが想像できた。ただ、実際にふたを開けてみると…。大入り満員というわけではなかったがオーディエンスの皆さんの反応がとてもアクティブで、パネルを組織してくださったスラブ研究センターの松里公孝先生のディスカッションとGWUのHenry Hale氏のチェアのもと、質疑応答も大いに盛り上がった。

というわけで、心配事もパネルが終わってしまえば良い思い出となり、今回のASEEES参加は実り多きものとなった。巡った数々のパネルは全般的に質の高いものが多く、大変勉強になった。また、いろいろな出会いがあった。これまで名前だけは知っていた研究者たちと

安達祐子（上智大学）

2011年11月17日から22日まで、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の一環として、ワシントンDCに滞在した。目的はASEEES（Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies スラブ東欧ユーラシア学会、AAASSから改称）の年次大会でのパネル報告、およびジョージワシントン大学（GWU）で開催されたセミナーでの報告であった。

ASEEESへの参加は今回が初めてだった。かねてから11月になると、AAASSのプログラムを眺めながら渡米したいという思いを募ら

の出会いをはじめ、大学院時代にお世話になった人々との懐かしい再会、また私のことを論文などを通じて知っていると言ってくれた人々と出会えたのは嬉しい驚きだった。なんだか今回すっかり刺激を受けてしまった私は、来年はできれば今回知り合った研究者とパネルと一緒にやろうとこっそり心に決めたのだった。

ASEEESでの報告の翌日、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」とGWUのエリオットスクールとのジョイント企画としてセミナーが開催された。題して“China, Russia, and the Existing World Order: Seeking to Overthrow the Status Quo or Merely Pursuing Advantage within It?”。報告については、「ユーラシア地域大国の比較研究」第2班より松里先生、大串さん・安達報告、第3班より田畑伸一郎先生、金野雄五さん報告という4本立てで、



GWUとのジョイントセミナー

これにコメンテータとしてエリオットスクールのIERES（欧州ロシアユーラシア研究所）より Marlene Laruelle 氏、アジア研究所である Sigur Center より Deepa Ollapally 氏、そしてGW ビジネススクールより Jiawen Yang 氏が参加した。プログラム詳細についてはGWU が立派なフライヤーを作成しているのでそちらをご参照いただきたい：http://www.gwu.edu/~ieresgwu/assets/docs/11.21.11_Panel.pdf。GWUでもロシア・中国・インドを含む大国比較プロジェクトを行っていることを今回初めて知ったのだが、ユーラシア地域大国を対象とした比較研究への関心が高いことがセミナーに出席してくださった聴衆のリアクションからもうかがうことができた。学生や研究者をはじめ、ジャーナリストやシンクタンク、NGO関係者が出席し、セミナー直後に軽くレセプションがあり、意見交換の時間が設けられた。

このたびの「ユーラシア地域大国の比較研究」とGWUとのジョイントセミナーは、スラ研の松里先生や田畑先生のご尽力のもと実現したのであるが、その実現プロセスを一部なりとも垣間見ながら強く再認識したことがある。こうした企画の実現には、研究能力はもとより、グローバルな発信力・交流力・コーディネーション力を身につけることがホントに重要だな…と。つまり、今回のようなコラボ企画を成功させるためには、相手とのコンスタントな交流が必要だし、ネットワークをつくるためには自分の研究を常に発信していないと相手に認知されない。企画を実現するためにはコーディネーション力がないとだめ。また、そういった企画によって研究の発信の機会を設けることができ、そういう研究会を通して新しい交流も生まれるが、築いたネットワークはメンテナンスしないといけない。こうして書くと、当たり前のように聞こえるかもしれないが、言うは易く行うは難しで、自らの至らなさを反省しつつ、帰国の途に就いた。

以上のように、久しぶりに訪れたワシントンでの滞在はなにかと有意義なものとなった。おまけ的にはあるが、GWUセミナー参加の数時間前に、カーネギー財団でロシアに関するセミナーが催されたので立ち寄ってきた。シンクタンクや国務省スタッフからの実務的な質問が目立ち、ワシントンDCならではの雰囲気に触れることができた。さらに個人的には、2年間ほどDCで過ごした修士課程時代のことを思い出しながら、初心に帰ることもできた気がする。

オックスフォード大ロシア・ユーラシア研究センターの今とITPプログラムセミナーの開催

家田修（センター）



ITP 会議のようす

今年で4年目を迎えたITPプログラムは、ハーバード大学に佐藤圭史さん、ジョージ・ワシントン大学に劉旭さん、そしてオックスフォード大学に加藤美保子さんが派遣されています。このうち、オックスフォードのセントアントニオ校ロシア・ユーラシア研究センターで加藤さんが主催した研究セミナーに、筆者はスラ研側の担当教員として参加してきました。セミナーの中身については改めて加藤さんが帰国後に報告すると思いますので、以下では今のロシア・ユー

ラシアセンターの現況なども交えて、同センターの訪問記を記します。

同センターは長年、ロシア政治の専門家アーチャー・ブラウンが長を務め、そのあとを引き継いだのが、ロシア外交を専攻するアレックス・プラウダでした。この二人の他に歴史家でレーニン研究者のロバート・サービス、そして経済の専門家キャロル・レオナードが主力メンバーでした。しかし、数年前にブラウンが定年退職し、レオナードも既にカレッジを去り、今年にはプラウダが、そして来年はサービスが定年を迎えるそうです。つまりオックスフォードのロシア研究は一気に世代交代の時期を迎えています。

その中で昨年からは新センター長になったのが、ブラウンの後継としてロシア政治を専門とする新進のポール・チェイスティです。彼はリード大学で博士号を取得し、セントアントニオ校でポスドク研究員を務め、出身大学に戻った後、2005年からオックスフォード大学に勤務しています。主著に *Legislative Politics and Economic Power in Russia* (Palgrave, 2006) があります。プラウダがセントアントニオの副校長に抜擢されたため、少し早いセンター長への就任となったようです。

チェイスティは柔軟な思考の持ち主で、気さくな人柄でもあり、スラ研とのITPプログラムにも積極的に関わってくれています。幅広い関心の持ち主でもあります。たとえば、私の今の関心事について尋ねられたので、日本での原発事故とチェルノブイリ事故との比較研究、あるいは一昨年のハンガリーでの環境汚染事故に対する社会の対応の話をする、自分も危機管理や防災学に興味を持っていると言って、研究室の一角にまとめてあった10センチほどの束になった関連文献のコピーを手渡してくれました。そして「この中にはチェルノブイリ関連の論文もあるよ」と言うのです。中をみると、ロシアに限らず、防災学全般にわたる文献目録もあり、膨大な量でした。福島とチェルノブイリ、さらにはハンガリーまで視野を広げた研究をどうまとめようかと常々考える毎日だったので、英語圏での研究の蓄積に圧倒されると同時に、強い援軍を得た思いでした。

チェイスティとの話はあれこれと雑談にも及びましたが、センターの世代交代という意味

では、経済専門の後継者がなかなか見つからないという悩みを知りました。かつてはマイケル・ケイザーという大御所がいて、退職後もセンターのセミナーには必ず顔をだしていましたが、今回は見かけませんでした。しかもレオナードも去ってしまい、確かに、経済が手薄になっています。イギリスでも若手の間ではロシア経済論はあまり人気がないようです。

世代交代にはイギリスの国立大学教員定年制の改革も一役買っているようです。プラウダの話では、国立大学教員の定年が早まり、65歳で退職することになったというのです。もっともオックスフォード大学は、大学としては国立、カレッジとしては私立という二重の構造になっているので、国立大学教員として定年を迎えても、カレッジの教員（フェロー）としてはまだ数年の猶予があるとのこと。ブラウンはカレッジの方も定年を迎えています。元気に（前よりも若返った感じでした）研究会に出席しています。夕食会で同席し、ご機嫌伺いをすると、「研究に専念できている。いまは各国共産党の比較を手掛けている。日本共産党のことも勉強している」、「修吾（皆川修吾先生のこと）は元気か、まだ現役か」などと、衰えを見せない感じでした。定年後も本人が元気であれば、いくつになっても現役のように研究活動に参加できるのは、イギリスでもオックスフォード（とケンブリッジ）の特権でしょう。



新センター長のチェイスティ氏



会議後のハイテーブル

さて、加藤さん主催の研究セミナーは大変な盛況でした。スペインから客員でセントアントニに滞在しているモラレスが言うには、「今年度では、定例セミナー以外の研究会としてはこの研究会が最大規模だ」とのことでした。ちなみに彼はITPセミナーで司会役を務めてくれました。今回のITPセミナーのタイトルはOrigins, Emergence and Development of Russia's Multilateralism in the Asia-Pacific Region (1986-2012)でした。基調報告はアメリカのロバート・レグヴォルドとロシアのアレクサンダー・ルキンが行い、午後のセッションではピーター・フェルディナンド（ワーウィック大）、クリストファー・レン（シンガポールの外交専門家）そして加藤さんが報告しました。非常に多彩な顔ぶれで、通常はこの種の専門的な研究会にはセントアントニ内部の研究員でも限られた範囲でしか顔を出さないのに、今回はカレッジの学生、他のカレッジの研究者、ロンドンの外務省（中国専門家）、そしてロシアに関心を持つ市民も参加しました。私が

10年前に同じ部屋で報告した研究会は内輪の人間だけだったことを思い出し、ITPのおかげで、日本の若い研究者の存在が広く紹介できるようになったことに、隔世の感と同時に、大きな喜びを覚えました。また、研究会のあとには加藤さんが亭主役を務めたハイテーブル（晩餐会）も用意されていました。

来年度でITPは終了ですが、チェイスティはその次はどうなっているのかと、継続に前向きな姿勢でした。二つの研究センターにとってだけでなく、日本と世界のスラブ研究をつなぐ役も担い始めているこの制度を今後も継続したいものです。

境界のスラヴ語「ゴース語」を考える

野町素己（センター）

1. 「セルビア・クロアチア語問題：4でも0でも、2でもなく」

「先生、セルビア語とクロアチア語は2つの別の言語ですか？また、ボスニア語とはなんですか？」

この質問は、私が学生時代「セルビア・クロアチア語」を勉強していたときに、初・中級の授業を担当されていたS先生にしたものである。S先生は、初心者の方に丁寧に解説してくださった上で、「私は言語研究者ではないから、言語学者に聞いてみてください」とおっしゃった。それから10年近く経ち、現在は私が学生から同じ質問をしばしば受けるようになった。12月に東京のある大学で行った集中講義でもやはり同じ質問をされた。自分が学生だったときとの違いを挙げるとすると、「モンテネグロ語とはなんですか？」という質問が加わったこと、また「セルビア・クロアチア語」という名前があまり聞かれなくなったことだろう。

バルカン研究者、特に旧ユーゴスラヴィア諸国をフィールドとする研究者には、常にこの種の問いが付きまとうが、これは一種の宿命であろう。そしてこのような問いに対して、いつもクリアカットな回答が求められるが、実際には、誰もが納得する答えを出すことはほぼ不可能で、特に（諸）言語の担い手である当事者を等しく納得させることは、現状では絶望的であり、この状況はしばらく変わらないであろう。

ここで問題となっているのは、基本的に東ヘルツェゴヴィナ地方の南スラヴ方言を基盤とし、それぞれの地方色を標準語に含めている言葉、かつては「セルビア・クロアチア語」と呼ばれ、今日それらはクロアチア語、セルビア語、ボスニア語、モンテネグロ語の「4言語」と数えられることが増えてきている言葉のことである。しかし、モンテネグロ語という名称は、大体1990年代に活発化し、特に2006年にモンテネグロがセルビア・モンテネグロから独立したあたりから既成事実化したため、それまでこの地域で使用されてきたのはクロアチア語、セルビア語、ボスニア語の「3言語」だったことになる。ただし、ボスニア語も、19世紀末に導入されかけた経緯があるものの、頻繁に用いられるようになったのは1990年代以降、特に1995年のボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争が終結した Dayton 合意以降にその名称が公式化してからである。したがって、それまで存在したのはクロアチア語とセルビア語の「2言語」ということになる。しかし、モンテネグロ語やボスニア語は、あくまでも政治的に生まれた言語であり、歴史的に形成された独自の文語の伝統を有してないため、独立した言語としては認められないのではないかという見解が、今でも繰り返し聞かれる。

では、「2言語」のセルビア語とクロアチア語だが、これは話が少しややこしい。19世紀の南スラヴ諸民族の統一を目指す運動と連動して、上記の東ヘルツェゴヴィナ方言を基礎に唯一の文語を目指す「ウイーン文語協定」が1850年に宣言され、ここにいわゆる「セルビア・クロアチア語」という「1言語」が宣言された。しかしこの協定に公的な拘束力はなく、ク

ロアチア人は自分たちの言葉の伝統を保持する傾向があり、またセルビア人の間でも意見は分かれていた。特に当時のセルビア文化の中心であったヴォイヴォディナのセルビア人エリートにとっては、ロシアの影響が濃い言語文化伝統を捨てて、ヴォイヴォディナ方言とは異なる東ヘルツェゴヴィナ方言に一元化することは受け入れ難かったため、宣言された「唯一の文語」の形成は結局不完全なものになり、これが今日に続いているのである。その後も離反と接近を繰り返しつつ、この不完全さを乗り越



ゴラ地方の地図
(パリム・コンバ著『ゴラと20世紀の伝統衣装』より)

える試みは幾度かあり、例えば1954年の「ノヴィサド協定」で再び「唯一の文語」が宣言されるものの、結局のところ、様々な矛盾点を残す「緩い統合」でしかありえなかった。それもあり、そもそも統一された「セルビア・クロアチア語など存在しなかった(=0)」という立場もある。またセルビアでは、「クロアチア人は土着の方言を文語にする道を絶ち、ヴーク・カラジッチのセルビア語を文語に採用したため、クロアチア語はそもそもセルビア語。だからセルビア・クロアチア語は存在しなかった。存在するのはセルビア語だけ」という意見も聞かれる。

2. その他の「セルビア・クロアチア語」としての「ゴラ語」

前ふりが長くなったが、ここでそれぞれの見解の妥当性を検討したいわけではない。頻繁に議論されるクロアチア語、セルビア語、ボスニア語、モンテネグロ語の有無、その現状や正当性に関する議論に尽きるのではなく、こういった政治や社会の変動が、言葉の担い手のアイデンティティに様々な変化をもたらすことは珍しくない。ときに、話者の潜在的に存在していた言葉に対する意識が鋭くなった結果、新たな「言語」が生まれる可能性は至るところに存在している。上記の「セルビア・クロアチア語」との関わりにおいて言うならば、言語の定義にもよるが、この地域の言語の数が4よりも増える日があるかもしれない。そう思わせるのが、ヴォイヴォディナ地方北部で話されるブニェヴァツ人の言葉や、主にコソヴォやアルバニアのゴラ人の言葉である。「ブニェヴァツ語」に関しては稿を改めるとして、ここでは「ゴラ語」について考えてみたい。

ゴーラとはコソヴォ（18村）、アルバニア（9村）、マケドニア（2村）に分断されている地域の名称であり、その名称は「山」を意味する。この地域に住むイスラム教徒の南スラヴ人は「ゴラニ（ゴーラ人）」と呼ばれ、自らは「ナシンツィ（我々の人々）」とも呼んでいる。

では、彼らが話す言葉は何語だろうか？彼ら自身は「ゴランスキ（ゴーラ語）」あるいは「ナシンスキ（我々の言葉）」と呼んでいる。この言語の属性には様々な見解がある。例えば、ブルガリアの研究者は19世紀以来伝統的にこの地域の言葉をブルガリア語の方言と見なしている。それに対しマケドニアの学者はマケドニア語西部方言に分類している。セルビア人学者は意見が分かれ、例えばパヴレ・イヴィッチはマケドニア方言と見なしているが、ラディヴォイェ・ムラデノヴィッチは、あるときはセルビア語とマケドニア語の過渡的方言、違



レジェブラリ氏の著作

ときはセルビア語の方言、また別のときにはマケドニア語の方言と立場を変えているようである。これに加え、ボスニアの方言学者は、ゴーラ人の言葉を「ボスニア語の方言」と定義している。これは地理、方言的、歴史的な連続性ではなく、「ムスリムの南スラヴ人の言葉」という理屈に基づいている。こうなるともはや学術的とは言い難いが、当のゴーラでは、ボスニアで刊行されたボスニア語の教科書による教育が既に導入されているので、ゴーラ人が用いている文語（の1つ）は事実ボスニア語となっている。

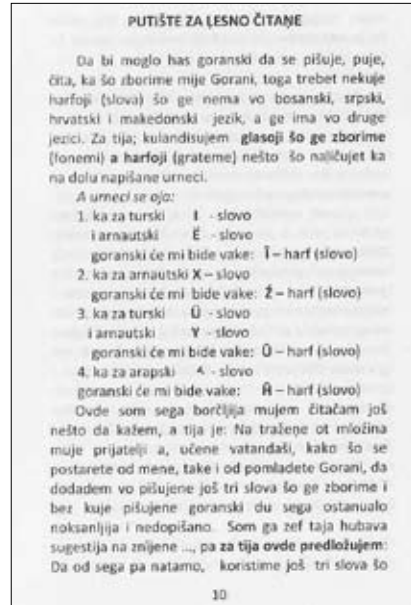
3. ゴーラ語作家ラマダン・レジェブラリ

ゴーラ語が独立した1言語か方言か、これは定義にもよるし、ゴーラ語の話し手によっても意見は様々である。ただ、その使用範囲は基本的に日常会話のみで、目下文語としての規範もなければ、ゴーラ語によるマス・コミュニケーションや教育などもない。したがって、セルビア語、マケドニア語、ブルガリア語などの発達した文語を有する言語とは状況が異なり、「地元の方言」に近いだろう。余談だが、私がセルビアに留学していたときに、ノヴィサド市で、あるゴーラ人が窃盗事件で逮捕された。ゴーラ人の被告は、自分の母語はセルビア語ではなく「ゴーラ語」であるから裁判には「ゴーラ語」の通訳が必要だと主張した。そこで裁判所からノヴィサド大学のセルビア語学科に、「ゴーラ語」は存在するか、もし存在するならば通訳はあるかという問い合わせがあった。セルビア語学科の対応は「それはセルビア語の方言だから『ゴーラ語』は存在しない。従って通訳もない」というものだった。

しかし「書き言葉」が皆無という訳ではない。例えば、ハミド・イスリヤミというゴーラ出身の作家は、1990年代にセルビア語とゴーラ語による詩集や劇を多く刊行し「ゴーラ語とセルビア語で書く詩人」として紹介されている。この作家はセルビア語のキリル文字とラテン文字をそのまま用いており、またその他の作家（と言っても数人だが）も、基本的にセルビア語の文字から外れることはない。

この意味において、精力的にゴーラ語で活動을続けるラマダン・レジェブラリ（1944 -）の一連の著作は目を引く。レジェブラリ氏は、2005年から「チェクメジェ（宝箱）」という昔話やおとぎ話の著作を刊行している。昨年12月にその最新刊の第3巻が私のもとに届け

られた。レジェプラリ氏は「ゴース語にはボスニア語、セルビア語、クロアチア語、マケドニア語にはない音があるので、新たな文字が必要である」とし「セルビア・クロアチア語」のラテン文字に4文字と3つの補助記号を加え、その文字体系を基に、ゴース語の様々な下位方言で執筆を行っている。3巻ではさらに3文字を追加して、その精密化を試みており、彼が導入した文字を用いた執筆活動は、将来編まれるべきゴース語文法の第一歩となっていると主張する。またこの3巻では「ゴース人が中央アジアから移住した証拠は多数ある」とし、南スラヴではなく、そこにゴース語の由来を求めている。このような言葉の「神話化」と「差別化」は、特に小さい言語の独自性を正当化するパターンの一つであり、その信憑性はない。また彼の文字システムに反対意見も少なくなく、言語学的に見ても適切とは言えないところもある。そして彼の正書法が、超方言的な共通の正書法になるとは俄かに思えないが、彼の執筆活動は高い評価を得ており、発行部数は第3巻だけで1500部にも上ることは無視できない事実である。



レジェプラリ氏が提案する文字

4. ゴース語は境界を越えるか？

マケドニア側ではゴース語による文化的活動は行われていない。アルバニアではナジフ・ドクレ氏を中心とするゴース語による活動が行われ、ドクレ氏は2007年に1400頁もの辞典を刊行している。ただ彼らは目下、特に言語文化の保護と発展に関わる跨境的な共同作業は行っていないようである。しかしインタビューに応じてくれたイドリジ・サディク氏によると、アルバニア側で最近ゴース語の歌や踊りのコンサートが開催され、それにコソヴォのゴース人も参加したとのことである。今後ますます跨境的な活動がゴース語文化に重要な意味を持つだろう。そのために言語学者が地元の活動家と協力して果たすべき役割は小さくないことを改めて認識するのであり、こういった境界地域の言語問題の比較研究は、類似した問題を持つ他地域の言語文化の保全への貢献にもなる。そのような視点から今後ゴース語研究に取り組みたいと考えている。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2012年3月16日 シンポジウム「中口国境地域：共生への期待と不安」 於富山大学
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2012/img/20120202poster.pdf>
- 7月4-6日 新学術領域研究「比較地域大国論」第7回シンポジウム 於スラブ研究センター
- 9月6-8日 第4回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於インド
- 10月6-7日 2012年度ロシア・東欧学会研究大会 於同志社大学

11月13-16日 BRIT XII 大会 in 福岡・釜山

<http://www.borderstudies.jp/brit2012/top.html>

11月15-18日 ASEEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於ニューオーリンズ

<http://aseees.org/convention.html>

2015年8月3-8日 ICCEES 第9回大会 於幕張

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ (裏表紙参照) にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 南サハリン占領初期のソ連文書 ◆

権太連盟の工藤信彦氏および、センター元研究員の原暉之北大名誉教授の仲介により、センター図書室は、1945年8月にソ連が日本領樺太に侵攻して以後、ソ連政府による初期の南サハリン統治に関する、サハリン州国立文書館 Государственный архив Сахалинской области の収蔵文書の写しを入手することができました。

この史料は、元富山国際大学教授の白鳥正明氏が、1990年代の後半に現地で収集したもので、民政局や現地のソ連側金融機関が、1945-1950年に作成した史料を含んでいます。

これらの史料は、小型段ボール1箱に収められ、現在はとりあえず未登録ですが、白鳥氏の作成したリストにより概要を把握することができます。図書室としては、今後、適宜、整理・登録を進める予定です。[兔内]

◆ モスクビチャニン誌 (マイクロフィルム) の完結 ◆

センターニュース126号(2011年夏)でお知らせしました、モスクビチャニン誌(1841-1856年)のマイクロフィルム購入は、昨秋に完結しました。[兔内]

◆ 工藤幸雄氏および松本忠司氏旧蔵資料の整理状況 ◆

センターニュース118号(2009年夏)でお知らせしました工藤幸雄氏旧蔵資料については、昨年末までに、図書の整理がほぼ終了しましたので、お知らせします。雑誌、その他のファイル類は、登録・整理待ち状態です。

同124号(2011年冬)でお知らせしました松本忠司氏旧蔵資料については、年明けから図書の整理が進み、もうじき終わる見通しです。こちらの雑誌の分は、先行して整理済みです。[兔内]

編集室だより

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

第32号は、掲載本数が少なく号として成立しなくなったため、33号に投稿されたものと合わせて刊行する予定です、現在編集作業を進めています。[野町]

◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第59号への投稿原稿は、現在、査読結果を踏まえた修正稿が集まっており、編集委員会で再検討をおこなっております。[長縄]

会議 (2011年11月～12月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2011年度第2回 12月10日

- 議題
1. スラヴ研究センターの運営について
 2. その他

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

12月10日

- 議題
1. 共同研究・共同利用公募に係わる審査について
 2. その他

◆ センター協議委員会 ◆

2011年度第3回 11月24日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

2011年度第4回 12月6日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース127号以降2012年1月末までのセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。[望月／大須賀]

- 10月29日 川野真治（元京都大）、藤原節男（元原子力安全機構）
11月24日 Urazgali Selteyev（ユーラシア大・院、カザフスタン）
11月7日 Kermen Nadneeva（カルムイク国立大、ロシア）
11月10日 本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）
11月11-13日 Iurii Apresian（ヴィノグラードフ名称ロシア語研究所、ロシア）、Adrian Barentsen（アムステルダム大、オランダ）、Rosanna Benacchio（パドヴァ大、イタリア）、Jan Ivar Bjørnflaten（オスロ大、ノルウェー）、Igor' Boguslavskii（ハルケーヴィチ名称情報伝達問題研究所、ロシア）、Ol'ga Boguslavskaia（ヴィノグラードフ名称ロシア語研究所、ロシア）、Greville Corbett（サリー大、英国）、Andriy Danylenko（ペース大、米国）、Romuald Huszcza（ワルシャワ大、ポーランド）、Leonid Iomdin（ハルケーヴィチ名称情報伝達問題

研究所、ロシア)、Viktor Khrakovskii (言語学研究所、ロシア)、Ruselina Nitsolova (ソフィア大、ブルガリア)、Jens Nørgård-Sørensen (コペンハーゲン大、デンマーク)、Boris Norman (ベラルーシ国立大)、Elena Paducheva (全ロシア科学・技術情報研究所、ロシア)、Elena Petroska (キリル・メトディ名称スコピエ大、マケドニア)、Predrag Piper (ペオグラード大、セルビア)、Ljubomir Popović (同)、Hannu Tømmola (タンペレ大、フィンランド)、Andreja Žele (フラン・ラモウシュ名称スロヴェニア語研究所、スロヴェニア)、秋山真一 (東京外国語大)、阿出川修嘉 (同)、恩田義徳 (同)、金子百合子 (岩手大)、小林潔 (神奈川大)、佐藤純一 (東京大)、四位エレオノラ (神田外語大)、菅井健太 (東京外国語大)、堤正典 (神奈川大)、中澤英彦 (東京外国語大)、中島由美 (一橋大)、服部文昭 (京都大)、丸山由紀子 (外務省研修所)、三谷恵子 (京都大)、村田真一 (上智大)

11月21日 亀田真澄 (学振特別研究員)

11月25-27日 HAN Hyein (韓国建国大)、JIN Pilsu (ソウル大、韓国)、KIM Jeonghee (東西大、韓国)、Viktoriya Kravtsova (一橋大)、Jussi Laine (東フィンランド大)、Duncan MacDuié (ニューサウスウェールズ大、オーストラリア)、Emily Makas (ノースカロライナ大、米国)、Carl Middleton (チュラロンコン大、タイ)、NAM Sanggu (東北亜歴史財団、韓国)、Tony Payan (テキサス大、米国)、Stephen Royle (クイーンズ大、カナダ)、James Scott (東フィンランド大)、Sorin Sok (カンボジア平和協力研究所)、阿比留勝也 (対馬市)、新井直樹 (福岡アジア都市研究所)、石垣雅敏 (根室市)、石川登 (京都大)、出水薫 (九州大)、大西広之 (日本司法支援センター)、緒方修 (沖縄大)、織田敏史 (根室市)、金平茂紀 (TBS)、加峯隆義 (九州経済調査協会)、川久保文紀 (中央学院大)、神頭成禎 (佛教大)、小濱啓由 (竹富町)、今野泰三 (大阪市立大・院)、佐藤秀志 (稚内市)、佐藤由紀 (早稲田大)、重政公一 (関西学院大)、新盛勝一 (竹富町)、鈴木寛和 (社団法人千島歯舞諸島居住者連盟)、鈴木勇次 (島嶼学会)、田邊裕 (東京大学名誉教授)、茶野順子 (笹川平和財団)、樋谷裕司 (内閣府沖縄総合事務局)、土井康裕 (名古屋大)、飛奈裕美 (学振特別研究員)、富本博 (竹富町)、長嶋俊介 (鹿児島大)、西島雅一 (福岡市)、古川浩司 (中京大)、堀場明子 (上智大)、本田良一 (北海道新聞・函館)、本間浩昭 (毎日新聞・根室)、松原孝俊 (九州大)、峯田史郎 (早稲田大)、三村光弘 (環日本海経済研究所)、山形創一 (内閣官房総合海洋政策本部)、山上博信 (国立民族学博物館)、山田吉彦 (東海大)、屋良朝博 (沖縄タイムス)、湯村義夫 (小笠原村)

11月28日 宇都宮徹宏 (写真家・スポーツジャーナリスト)

11月29日 Iveta Reinholde (ラトヴィア大)

11月30日 Adam Balcer (ヨーロッパ戦略センター、デモス・ヨーロッパ、ポーランド)、Katarzyna Pelczyńska-Nałęcz (ポーランド東方研究センター)、Rafał Sadowski (同)、Radosław Tyszkiewicz (駐日ポーランド大使館)、Beata Wojna (ポーランド外交研究所)

12月3日 山口たか (福島の子どもたちを守る会)

12月5日 David Abraham (外交問題評議会フェロー / 東京大)、机文明 (法政大・院)

12月10日 等々力政彦 (トゥバ民族音楽家)、横手慎二 (慶応義塾大)

12月12日 黒田晴之 (松山大)

12月15日 山崎佳代子 (詩人・翻訳家)

12月16日 Alla Kassianova (研究者、米国)

12月17-18日 石原俊 (明治学院大)、佐藤由紀 (早稲田大)、塩出浩之 (琉球大)、三木理史 (奈良大)、與那覇潤 (愛知県立大)

1月7日 中山大将 (京都大)

1月10日 Timothy Colton (ハーヴァード大、米国)

1月18-22日 Jane Burbank (ニューヨーク大、米国)、Nina Ershova (京都大)、Fatma Müge Göçek (ミシガン大、米国)、KIM Byung-Yeon (ソウル大、韓国)、Rob Kroes (アムステルダム大、オランダ)、Rudi Matthee (デラウェア大、米国)、Anna-Maria Misra (オックスフォード大、英国)、Aditya Mukherjee (ネルー大、インド)、Mridula Mukherjee (ネルー大、インド)、Onon Perenlei、Sergey Radchenko (ノッティンガム大、中国)、Willard Sunderland (シンシナティ大、米国)、Sergey Tkachev (総合地球環境学研究所)、TSAI Tung-Chieh (中興

大、台湾)、ZHAI Qiang (オーバーン・モントゴメリー大、米国)、ZHAO Yuming (北京師範大、中国)、秋田茂 (大阪大)、秋葉淳 (千葉大)、秋山徹 (日本学術振興会特別研究員)、浅野豊美 (中京大)、粟屋利江 (東京外国語大)、安藤潤一郎 (東海大)、五十嵐武士 (東京大学名誉教授)、池田嘉郎 (東京理科大)、石井明 (東京大学名誉教授)、井上貴子 (大東文化大)、岩田賢司 (広島大)、上垣彰 (西南学院大)、王柯 (神戸大)、大串敦 (大阪経済法科大)、小野瑞絵 (学習院大)、加藤篤史 (青山学院大)、川島真 (東京大)、管英輝 (西南女学院大)、木村崇 (京都大)、金野雄五 (みずほ総合研究所)、杉本良男 (国立民族学博物館)、杉山秀子 (駒澤大)、鈴木博信 (桃山学院大学名誉教授)、中溝和弥 (京都大)、中山大将 (京都大)、西山克典 (静岡県立大)、野村親義 (大阪市立大)、藤倉達郎 (京都大)、古矢旬 (東京大)、細井長 (國學院大)、堀井伸浩 (九州大)、丸川知雄 (東京大)、本村真澄 (石油天然ガス・金属鉱物資源機構)、山口昭彦 (聖心女子大)、山根聡 (大阪大)、湯浅剛 (防衛研究所)、横手慎二 (慶応義塾大)、吉田修 (広島大)、吉村貴之 (東京外国語大)

◆ 研究員消息 ◆

岩下明裕研究員は11月13～20日の間、新学術領域研究第1班「国際秩序の再編」に関する学会で研究報告及び意見交換のため、チリに出張。また、11月28日～12月2日の間、First Moscow Asia-Pacific Forum 2011 出席のため、ロシアに出張。また、12月4～10日の間、新学術領域研究第1班「国際秩序の再編」に関する国際会議にて研究報告、意見交換及び研究打合せのため、米国に出張。また、12月16～20日の間、笹川平和財団「境界地域研究ネットワーク JAPAN の設立」に関する打合せのため、韓国に出張。また、1月8～13日の間、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」に関する現地調査及び資料収集のため、中国に出張。また、1月15～18日の間、研究会出席及び研究打合せのため、インドに出張。

田畑伸一郎研究員は11月16～22日の間、新学術領域研究総括班「『ユーラシア地域大国の比較研究』に関する総括」に関する学会出席及び新学術領域研究セミナーのため、米国に出張。また、12月25～30日の間、新学術領域研究総括班「『ユーラシア地域大国の比較研究』に関する総括」に関する日印国際会議における研究成果発表及び意見交換のため、インドに出張。

松里公孝研究員は11月16～23日の間、新学術領域研究総括班「『ユーラシア地域大国の比較研究』に関する総括」に関する学会出席、研究報告のため、米国に出張。また、1月2～12日の間、新学術領域研究第2班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関するイスラム情勢調査のため、トルコに出張。

ウルフ ディビッド研究員は11月16～26日の間、科学研究費研究に関する学会にて研究報告及び意見交換及び資料収集のため、米国に出張。

望月哲男研究員は11月17～20日の間、ソウル大学ジョイントシンポジウム出席のため、韓国に出張。

長縄宣博研究員は、12月4～19日の間、科学研究費研究に関する資料調査のため、ロシアに出張。また、2月3～27日の間、新学術領域研究第5班「国家の輪郭と越境」に関する現地調査のため、ロシアに出張。

野町素己研究員は、1月16～30日の間、新学術領域研究第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」に関する2012年度シンポジウム打合せ、資料収集及び研究会参加のため、セルビア、イスラエルに出張。

2011年 恒例の年末パーティのスタッフより

教職員、研究員、大学院生、その家族、その友人、OBも駆けつけて、にぎやかにおこなわれました



日ごろお世話になっている事務係の方々にワインをふるまうセンター長



日本語教室で知り合ったインドの方から衣装を借りて、踊りを披露したアルメニア出身のNさん



よし、今夜は修士論文の締め切りが近いことなんか忘れて、羽をのばすぞ！



さあ、プレゼントだよ。〈自分が子どもだと思える人〉は集まって！ 子どもといっても、中には大学院生より背の高い子も

エッセイ	宇山智彦	アナトリー・レムニョフ氏を悼む	p. 12
	野田 仁	レムニョフ氏追悼文	p. 13
	星野 真	The 5th Indo-Japanese Dialogue on "The BRICs as Regional Economic Powers in the Global Economy" 参加記	p. 14
	安達祐子	フロントン DC 出張報告	p. 18
	家田 修	オックスフォード大ロシア・ユーラシア研究センターの今とITPプログラムセミナーの開催	p. 20
	野町素己	境界のスラヴ語「ゴーラ語」を考える	p. 22

2012年2月25日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 家田修
発行者 望月哲男
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>